

遺伝子工学による破壊——遺伝子組み換えの隠れたアジェンダ（書評）

【訳者注】これは NWO から見れば、最も許せない、最も発禁処分の対象とすべき、したがって我々にとっては、最も見逃せない、最も貴重な本であると考えられる。これは、このいくつかの書評から判断して間違いなく言える。ここで扱われているのは、犯罪エリート、銃や爆弾を使わない、しかしそれよりもっと恐ろしい遺伝子工学（“優生学”の美名だと言っている）という武器を使った、人類に対する究極の大犯罪物語のようである。「我々は恐ろしい世界に住んでいる」と言う、鼻で笑う人がいるが、この書評だけでも読んでいただきたい。彼らの究極の敵が、人類そのものであって、ロシアやシリア政府でないことがわかるだろう。

先日（5月18日）前米大統領ブッシュ・ジュニアが来日して、子宮頸がんワクチンの使用を、ほとんど強要するような講演を東京で行ったこと、またブッシュ・シニアがモンサント社に対して、遺伝子組み換え製品の厳しい安全基準を、喜んではずしてやったことも、考え併せるとよいだろう。（3/11「映像証拠：父ブッシュがモンサントと遺伝子操作を共謀」）なぜダーウィンが、我々の教科書から消えず、NHKでも宣伝されるのか、そのヒントもここにある。

F. William Engdahl

Global Research, July 4, 2016



Seeds of Destruction:

The Hidden Agenda of Genetic Manipulation

By F. William Engdahl

オンライン・メール注文特価

US\$ 18.00

<https://store.globalresearch.ca/store/seeds-of-destruction/>

この見事に研究調査された本は、小さな、社会 - 政治的なアメリカのエリート集団が、いか

に、人間が生きるための基盤そのもの、つまり我々の日々のパンの供給を、コントロールしようとしているかに焦点を当てている。「食物をコントロールする者は、人民をコントロールする。」これは GMO（遺伝子組み換え生物）の危険についての、ありふれた本ではない。著者エンゲダールは、読者を、権力の回廊の内部へ、科学研究所の裏部屋へ、大企業重役会議室の閉ざされたドアの背後へと導いていく。

著者は、利益追求の政治的陰謀、政府の腐敗と強制といった悪魔的世界を、説得力をもって暴露している。そこでは、遺伝子操作と生命体の特許申請が、食糧生産に対する世界的な支配権を握るために利用されている。この本がしばしば犯罪物語のように読めるとしたら、それは驚くことではない。まさにその通りなのだから。

エンゲダールの注意深く論証される批判は、科学技術としての遺伝子組み換えの習慣を取り巻く、よく知られた論争を、遥かに超えたところに達している。この本は、我々の目を開かせるもので、社会的正義と世界平和という大義に与する人々は、ぜひ読むべきである。

エンゲダールの世界観について恐ろしいことは、それがまさに現実であることだ。我々の文明は、人道主義的な理想の上に建設されてきたものだが、この新しい“自由市場”においては、すべて——科学、通商、農業、そして種子に至る——すべてが、少数のグローバル企業の所有者と彼らの政治的同行者の、手中の武器に変わってしまった。世界制覇を達成するためには、彼らはもはや、銃剣を振り回す兵士に頼らなくてもよい。彼らが必要とするのは、ただ食糧生産のコントロールである。

——*Dr. Arpad Pusztai*, 生化学者、前スコットランド *Rowett* 科学研究所

もしあなたが、社会 - 政治的アジェンダについて、なぜバイオテク企業が、GMO 種子を世界中に拡散しようとしているのかを、知りたいと思うなら、この慎重に調査研究された本を読むべきである。どのようにして、これらの企業が全人類へのコントロールを達成し、なぜ我々が、それに抵抗しなければならないかが、分かってくるであろう。

——*Marijan Jost*, 遺伝学教授、*Krizevci*, クロアチア

この本は、まるで途方もない規模の、殺人ミステリーのように読める。そこでは、4つの巨大な、アングロ・アメリカの農業ビジネス複合企業が、躊躇することなく GMO を利用し、我々の生きる糧そのものをコントロールしようとしている。

——*Anton Moser*, バイオテクノロジー教授、*Graz*, オーストリア

Arun Shrivastava による書評：

支配者集団の精神を支配してきた中心的問題は、資源の豊富な諸国家の人口削減であったが、問題は、必ず起こると思われる、強力なしっぺ返しを避けながら、どうやって世界中で集団的な間引きを実行するかということだった。アメリカの石油の貯蔵量が 1972 年に底をつき、実質的な石油輸入国になったとき、状況は非常事態となり、このアジェンダが舞台の中心に上った。ニクソン政権のカギ的な戦略家の一人だったキッシンジャーは、ロックフェラー一族に養育された人であり、彼が、“国家安全保障研究メモ” (NSSM#200) といわれるものを準備し、人口削減のプランを周到に策定した。このメモで、彼は 13 か国を特別に目標にしている——バングラデッシュ、ブラジル、コロンビア、エジプト、エチオピア、インド、インドネシア、メキシコ、ナイジェリア、パキスタン、トルコ、タイ、それにフィリピンだった。

使われるべき武器は食糧であった。飢饉の場合でも、食物が人口削減を促進するのに役立つだろう。次の言葉がキッシンジャー語録にある——「石油を支配する者が諸国家を支配する、食糧を支配する者が人民を支配する。」このカギを握る人々の小さな集団が、どのようにして、“人民支配のための食糧支配” というエリートの哲学を、短時間で、現実的な実行可能性へと変えていったのかという問題が、エングダールの本の背景をなし、これが始めから終わりまで、特に、ロックフェラー家とキッシンジャーを主要登場人物として、展開する中心テーマになっている。

エングダールは、ロックフェラー一族が、どのようにアメリカの農業政策を指導し、彼らの強力な、無税の、世界中にある基金を使って、これまで未知だった微生物学分野の、優秀な若い科学者の軍団を訓練したかを、説明している。彼は、いかに「優生学」の分野が、より受け入れられ易くするために、また本当の目的を隠すために、「遺伝学」と名を変えられたかを跡付けている。一握りの化学、食物、種子の企業が、その内部で米政府のカギを握る省庁の有能な人物の支持を得て、少しずつ戦略的に調整を重ねていくことによって、ほとんどあらゆる国において、規制の枠組みを書き換えることのできる、巨大企業が創り出されていた。そして、これらの——環境と人間の健康を保護するために——注意深く考案された規制枠組みを破壊するそのタネは、1920 年代にすでに蒔かれていた。

…これは複雑だが、高度に読み応えのある本である。全体が 5 部に分かれ、それぞれが 2 から 4 の章からなる。第 1 部は、種子と農業ビジネス会社への支持を保証する、政治的な工作運動を扱い、第 2 部は、広く“ロックフェラー計画”と呼ぶべきものを扱い、第 3 部は、いかに、横に統合された巨大企業が、ワシントンの地球惑星への静かな戦争のために準備されたかを扱い、第 4 部は、いかに GM 種子が、つゆ疑うことのない農家に対して放出されたかを論じ、そして最終部は、いかにエリートたちが食物を破壊し続けているか、そして農家が、最終的には、人口の大量間引きを行う主体となるかを論じている。著者は、どんな解決

案をも提出していない。彼にそれができないのは、ヨーロッパ人やアメリカ人をはじめ、世界中の人間が目覚め、真正面から、これらの犯罪者に立ち向かうのでない限り、それは不可能だからである。

(F. William Engdahl は、New World Order の主導的アナリスト、石油と地政学についてのベストセラー *A Century of War: Anglo-American Politics and the New World Order* の著者。彼の著書は、1 ダース以上の言語に翻訳されている。)

この今日、重要な意味をもつ本を [Global Research](https://store.globalresearch.ca/store/seeds-of-destruction/) にご注文ください！

<https://store.globalresearch.ca/store/seeds-of-destruction/>

